

## 家政学の定義

### 「家政学」名称の起源

・家政学の名称は、Home Economics の訳語として採用されたとされているが、Economics の語源は、ギリシャ語の Okios（家）と Nomos（管理）の結合した Oikonomos に基づく言葉であり、古くギリシャ時代に「家政論」（Xenophon 著）の中で「家政学は家の管理に従事する技術」としたことに発していると言われている。

日本で「家政学」の名称が教育分野で正式名称として使用されたのは、1948年新制大学家政学部発足時である。

### これまでの家政学の定義

・1984年「家政学将来構想委員会」（日本家政学会）においては、「家政学は、家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文諸科学を研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する総合実践的の科学である」と定義している。

・家政学の呼称については、国内外を問わず多くの議論があり、日本では、かつて家政学部と称していた学部が名称変更して「生活科学」「総合人間科学」等の名称を冠しているところもある。

### 家政学の意義と必要性

・人間はその周辺にある環境・物・人との係わりを持ちながら生活を営んできている。より質の高い生活を営むためにどのように生活を選び組み立てるかは、人間が生きる上での最も大切な意志決定の一つである。

・社会は、人間生活の集合体であり、個々の生活がその社会の基盤であることから、生活をいかに営んでいくかは社会の質を左右する大きな要因である。そのため、生活者の立場からは、生活を取り巻く社会の進歩や多くの学問分野の成果を生活の中にどのように取り込んでいくかという実践的課題について、総合的に判断する事が必要である。経済発展を基盤に考えられる産業の変化や、細分化され先鋭的に行われる諸学問の成果を組み込みながらの実践的な生活上の問題解決の研究が家政学である。

・豊になった現在の日本の社会では、曾てのように不足する物をどのように補って合理的に生活の質の向上を図るかといった問題ではなく、どのように自己の生活を規定し、選んでいくかが問題になる。生活を取り巻く技術の進歩はめざましく、物資も豊富に存在し、社会制度も変化する中で何に価値をおき、どのような生活を営むかを具体的な問題として提起し、解決していく事が必要とされている。

### 家政学の定義

以上のような事を勘案すると、家政学の定義は、これまでとほぼ同様に、家政学は、人間の日常生活における人と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社

会・人文諸科学を研究し、生活の質の向上とともに人類の福祉に貢献する総合実践的科学である、と言える。

#### 家政学に固有の特性

家政学は、生活に全てに関する実践的科学であることから、個人、家族、生活の最小単位が、それらを取り巻く生活に係わる事象、即ち、環境（自然環境、社会環境）、人、ものの全てとの相互作用である点の一つの大きな特色である。

家政学に係わる科学分野は、食物学、被服学、住居学、児童学、家庭経営学、家政教育学の6領域（1973年「家政学将来計画委員会報告」）とされていたが、それぞれの領域は、更に、関連学問分野と隣接しており、家政学に係わる範囲は非常に広いものになる。

また、生活の質の向上、人類の福祉に資する事を目的とした実践科学であることから、生活の向上の解釈、福祉に資することの解釈についての問題も発生する。

更に、家政学を総合的実践科学と考えるならば、生活を取り巻く諸現象に関する科学的成果を総合するだけではなく、実践に繋ぐことが肝要である。実践のためには、媒体として価値意識が存在しなくてはならず、価値意識を培うために周辺科学の総合化が行われなければならない。

この価値意識は、生活の質に係わる判断および実践力や意欲にも繋がるものである。その意味で、家政学に関する教育が肝要であり、家政教育・家庭科教育などがあげられる。